

## 古代の墳墓(2) — 平安時代前期

西暦794年、桓武天皇は平安京に遷都します。その後、鎌倉幕府が開かれるまで政治、文化の中心地として京都は栄えます。同じころの大宰府は以前と特に姿を変えることもなく、そのままの場所でやはり九州における政治や文化の中心地として繁栄しつづけます。そして都の影響は大宰府の隅々にまでおよび、墳墓を造ることも、やはり都の習慣の中で行われるようになります。

そこで今回は、前回紹介した奈良時代の墳墓についてこれまで発見されたいくつかの例をもとに、墳墓の歴史の一端を垣間見てみたいと思います。ただし平安時代はご存じのとおり約400年も続いた歴史がありますから、

今回は平安時代のなかでも前半（9世紀～10世紀）を中心に筑紫野市、太宰府市で発掘されました墳墓の資料からわかったことを述べてみたいと思います。

市内にあるこの時代の墳墓の遺跡は、杉塚の剣塚遺跡、大宰府条坊跡第99次調査地点、紫の峰畑遺跡などがあります。隣接する太宰府市では宮ノ本遺跡、前田遺跡、君畑遺跡などが知られています。

奈良時代の墳墓の位置と比較すると、大宰府を取り巻く平野近くの丘陵部分に位置している点ではあまり変化がないようですが、個別に見てゆくと墳墓が造られる場所は、低い丘陵かあるいは丘陵の裾部分にあることがわ



大宰府条坊跡第99次調査地点の平安時代墳墓群（黒ワクの部分）。  
廃された奈良時代の官道のあとに造られている。

かります。また、奈良時代は単独で造られていたものがほとんどであったのに対して、この時代には5～10基ぐらいが群がって造られるようになります。これは家族の首長しか埋葬できなかつた時代から、家族の中のある程度の人まで埋葬できるようになったことを物語っているとともに、一族でひとつの墓域を形成していることが理解できます。

また、前時代は火葬されて埋葬されるのがほとんどでしたが、木製の棺桶に入れてそのまま埋葬する土葬がほとんどになってきます。これは都で天皇が進んで土葬を行ったために、天皇を取り巻く貴族達が競って土葬を真似た結果だと考えられています。中央の影響が大宰府周辺に及んでいることを窺わせる興味ある事実です。

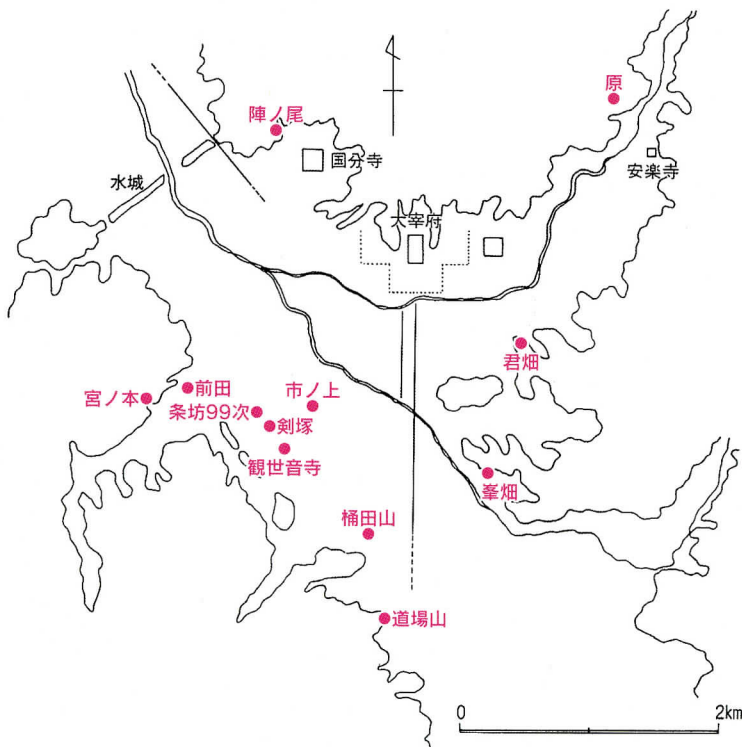
さらに土葬にすることで、死者を埋葬するまでの儀礼にも変化がみられ、棺桶の中には鏡や小刀などの副葬品が、棺桶の蓋の上には死者を供養する祭りに使った土器が置かれる

ようになります。大宰府周辺で特徴的なことは、この副葬品のなかに鏡の破片や陶磁器の破片を入れることです。どちらも破片にすることで鋭く尖った部分ができることと、ぴかぴかと輝くものであるという共通点があります。正確なことはわかりませんが、死者が冥土に旅立つ際の魔除けではないかと思っています。剣塚遺跡のものは中国唐時代の白磁碗を半分に分ったもので、たいへん珍しく貴重な資料です。同じような行為は宮ノ本遺跡でも見られ、やはり唐時代の鏡を半分に分ち割って埋納しています。

こうした貴重な品物を、しかも破碎して埋納できる人物は、大宰府の役人の中でもおそらく高位の人に限定されていたことでしょう。

奈良時代に比べて墳墓を造ることのできる階層が家族にまで広がったとしても、当時の社会全体からみればほんの一握りの人達であったことに変わりありません。

(狭川真一)



平安時代前期の墳墓分布図